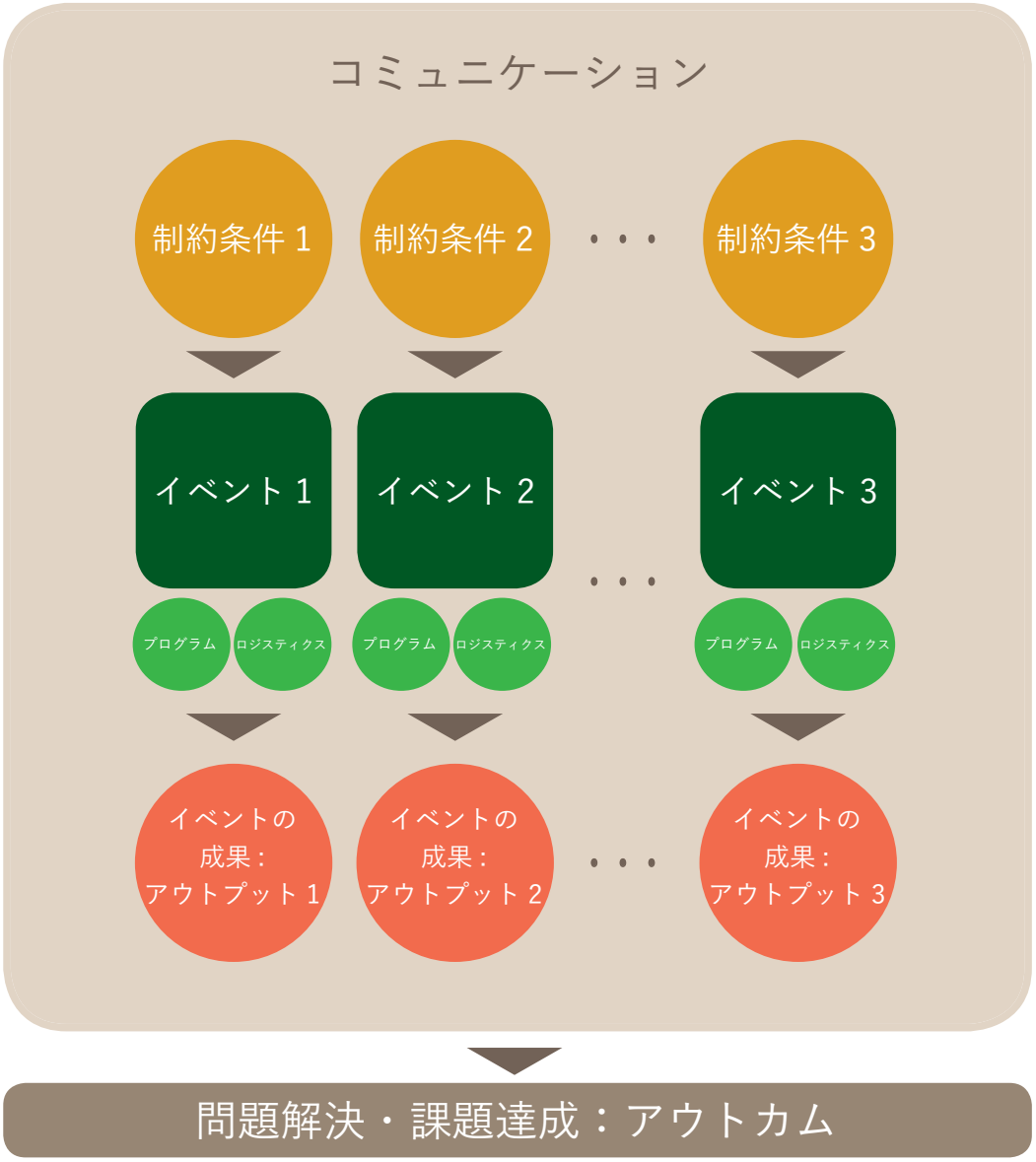
イベントのつくり方

コミュニケーション・デザインとイベント・デザイン



イベントのつくり方を考える上で、問題・課題をめぐるコミュニケーション全体のデザインと、個々のイベントのデザインの違いを意識することが大切です。
全体のコミュニケーション･デザインは、問題解決、課題達成（アウトカム）を目的とした中期・長期的な視点で取り組む必要があります。
他方、イベント・デザインは、大きな目的を見失わないようにしながら、個別の制約条件を踏まえて、比較的短い時間スケールで時宜を捉えて行うことが求められます。
イベントのデザインはその内容（プログラム）がどんなに優れていても、それを実現するための資源の確保と配分（ロジスティクス）が不適切では、十分な成果（アウトプット）は望めません。
プログラム・デザインとロジスティクス・デザインを両輪として、個々のイベントのアウトプットがコミュニケーション全体のアウトカムへ貢献するようにイベントをデザインしましょう。

イベント・デザインシート

あて先（内部資料の場合は不要）　　作成日

作成者

タイトル

1. 企画の趣旨
2. 背景
   （1）問題・課題
   （2）コミュニケーションの状況
3. イベントの目的
4. 予算・財源
5. プログラムの概要
   （1）目標
   （2）日時
   （3）場所
   （4）主催・共催・協力
   （5）対象・参加者
   （6）イベントの類型
   （7）ファシリテーター
   （8）アウトプット
   （9）評価
6. プログラムの詳細
7. ロジスティクス
   （1）事前
   （2）当日
   （3）事後
8. スケジュール
9. 留意点
10. 事務局

具体的にイベントをデザインするには、検討しなければいけないことがたくさんあります。慣れるまでは大変な作業に思えるかもしれませんが、検討項目はどのイベントでもある程度の共通性があり、何度か繰り返すうちに、自然とデザインできるようになるでしょう。
ここでは、一般的にイベントをデザインする上で考えなければならないことを「イベント・デザインシート」としてまとめました。次ページ以降では、各項目を考える上での留意点を説明しています。
具体的な問題・課題に当てはめてシートを埋めていくと、初心者でも必要事項を網羅したイベント・デザインができるようになることを目指していますが、困難な部分については、先行事例を参照したり、コミュニケーションの専門家に相談しながら考えてみてください。

企画の趣旨・背景・イベントの目的

企画の趣旨

イベント・デザインシートに書かれていること
イベント・デザインシートが作成された目的、理由

背景

問題・課題、コミュニケーションの状況

イベントの目的

イベントの目的・機能
イベントの成果（アウトプット）の宛先

企画の趣旨

イベント・デザインシートに何が書かれているのか、作成された目的､理由を第三者が一読して理解できるように記載します。シート全体を記載した後に見直して、趣旨とシートの記載が整合しているかどうか確認しましょう。

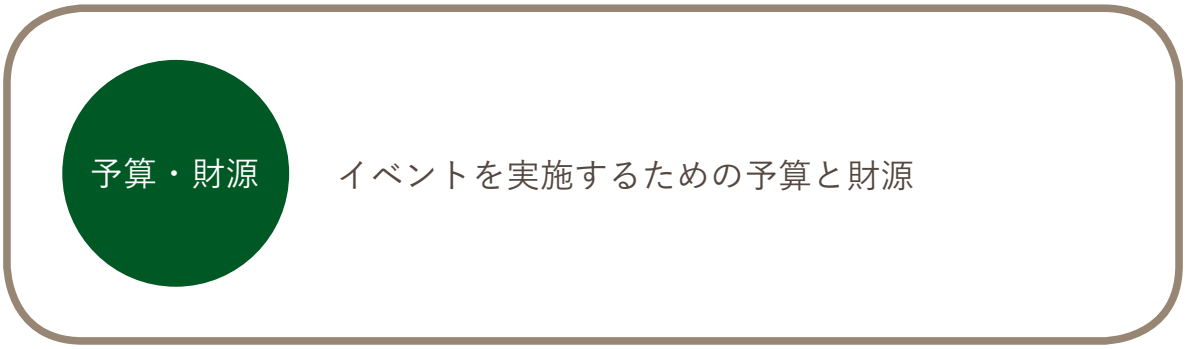
背景

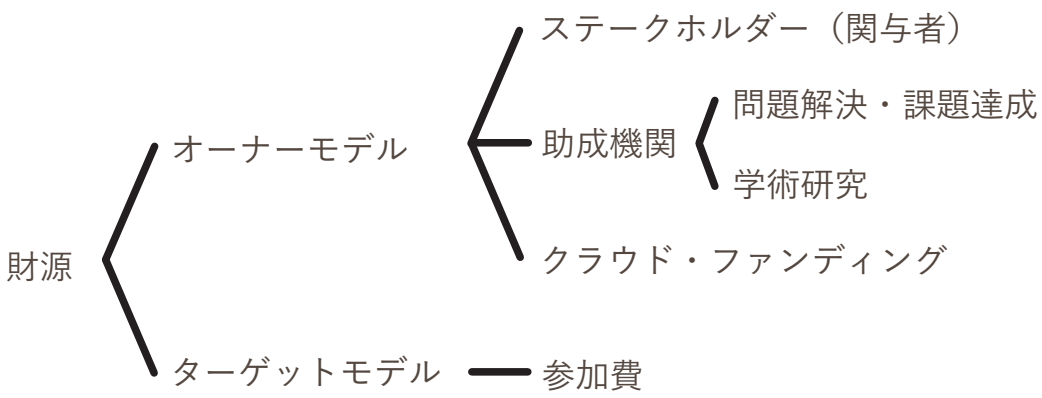
解決すべき問題、達成すべき課題についての分析、問題・課題をめぐってどのようなコミュニケーションが行われ、現状はどのようであるかを記載します。

イベントの目的

背景を踏まえ、どのようなコミュニケーションの状態を目指すのか（アウトカム)、そのためにどのような目的・機能のイベントが必要であり、イベントの成果（アウトプット）は誰に向けられているのかを記載します。

予算・財源


予算・財源
イベントを実施するための予算と財源


財源
オーナーモデル
ステークホルダー（関与者）
助成機関
問題解決・課題達成
学術研究
クラウド・ファンディング
ターゲットモデル
参加費

予算

イベントの実施に使用できる予算を記載します。事前の準備、当日の運営、事後の総括に至るまで、必要な経費をもれなく見積もり、予算内に収めましょう。イベントの内容、規模に大きな影響を与え、制約条件の中でもっとも重要な要素であると言えます。

財源

予算の確保の仕方、財源を記載します。予算は規模だけでなく、財源がどこであるかが重要です。財源の種類には、イベントを支援する者（オーナー）が費用を負担する「オーナーモデル」とイベントの参加者（ターゲット）が負担する「ターゲットモデル」に大別できます。オーナーには、問題・課題のステークホルダー（関与者）、政府機関や民間の助成機関、クラウド・ファンディングなどのパターンがあります。だれがオーナーになるかによって、イベントの目的や支出できる費目が制限されたり、中立性の確保、説明責任の範囲などに配慮が必要になる場合があります。

プログラムの概要 – 目標・日時・場所

目標　イベントの獲得目標

日時　イベントを実施する日時

場所　イベントを実施する場所

目標

イベントの中で達成したい目標を記載します。コミュニケーションの宛先を考えながら、具体的で、可能な限り測定可能な目標を定めましょう。
明確な目標設定は、イベントの適切な評価につながり、その後のコミュニケーションへフィードバックすることができます。

日時

イベントを実施する日時を記載します。参加者の属性（職業、年齢、家族構成など）によって、参加しやすい時期や時間帯、長さが変わります。設定の仕方によっては、参加して欲しい人が来られなかったり、意図せずに特定の属性を持った人を排除してしまう可能性もありますので注意しましょう。

場所

イベントを実施する場所を記載します。アクセスのしやすさ、設備の充実度といった利便性は重要な要素ですが、新しい発想を生む非日常的な空間、リラックスできる親密な空間、問題と関わりの深い象徴的な空間など、イベントの目標に応じて適切な「空間」をつくりましょう。

プログラムの概要 – 主催・共催・協力 / 対象・参加者

主催 共催 協力	イベントの主催者、共催者、協力者
対象 参加者	イベントの対象、参加者

参加者の選定方法	依頼・招待・推薦 公募（先着順、選考、抽選、条件付き抽選） 無作為抽出 条件付き無作為抽出

主催・共催・協力

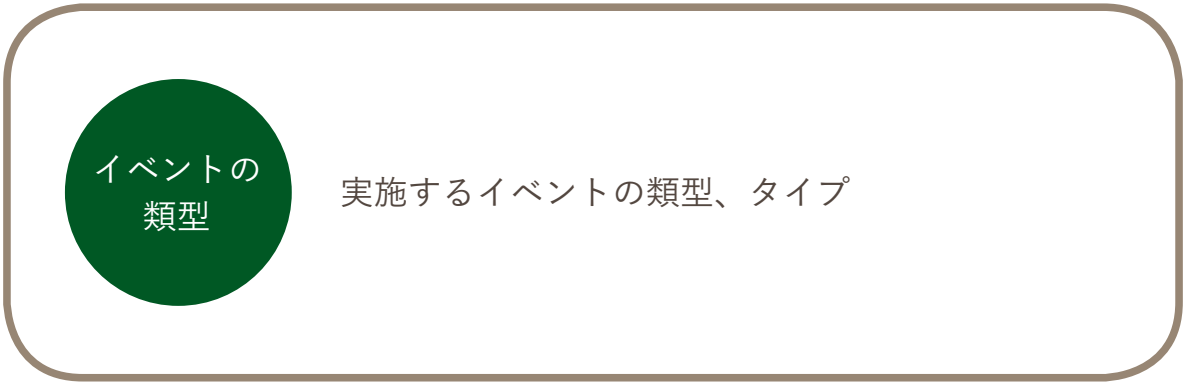
イベントの主催者、共催者、協力者を記載します。主催者は、対外的にイベントの責任主体を示すものであり、イベントの信頼性にも関わります。共催者、協力者を得られれば、具体的な支援を得たり、注目度を高めたりすることもできますが、第三者から見たイベントの印象に影響するため、中立性を保つ必要がある場合などには注意が必要です。

対象・参加者

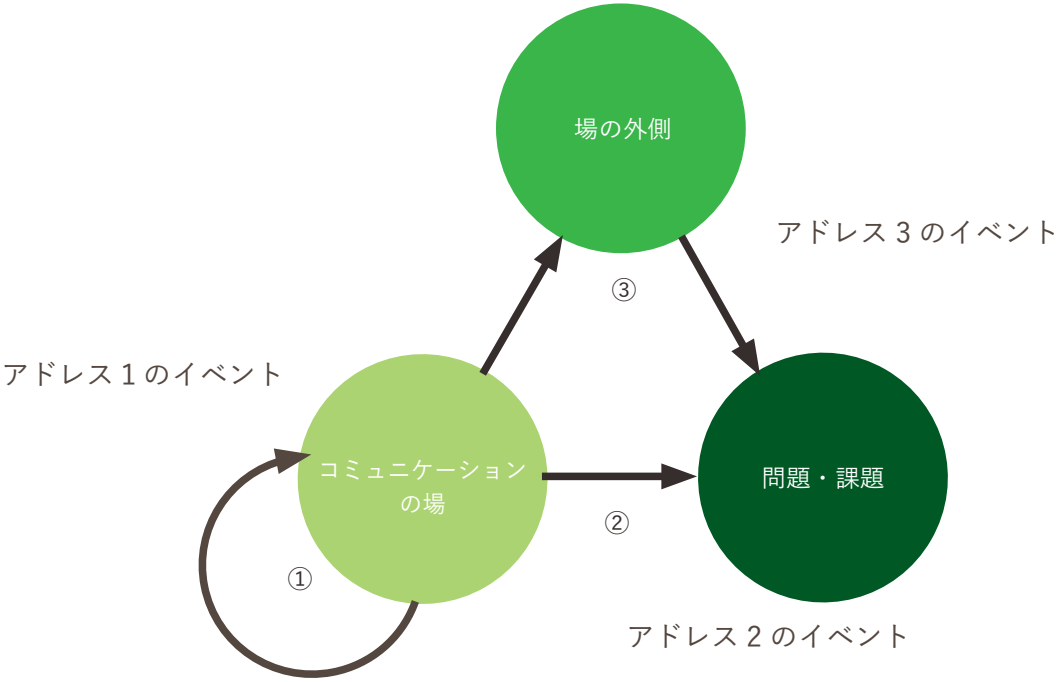
イベントの対象者、参加者とその集め方を記載します。参加者の集め方は、「依頼・招待・推薦」、「公募（先着順、選考、抽選、条件付き抽選）」、「無作為抽出」、「条件付き無作為抽出」に大別できます。それぞれが持つ特徴、メリット、デメリットをよく理解して、イベントの目標に応じた方法を選びましょう。

例１）公募
　　メリット：高関心層が集まりやすく、積極的な発言や関与が期待できる
　　デメリット：得られる意見の幅は狭くなりがち
例２）無作為抽出
　　メリット：社会の意見分布を反映した偏りのない議論が期待できる
　　デメリット：抽出プロセスや、謝金、旅費などの実施コストが大きい

プログラムの概要 － イベントの類型



コミュニケーションのあて先とイベントの類型



アドレス１のイベント

コミュニケーションの場における知識・情報共有や関係形成などが主な目的。

例：出張授業、勉強会、講演会、セミナー、シンポジウム、サイエンスカフェ、街頭演説、SNS による発信、マスメディアによる発信など

アドレス２のイベント

コミュニケーションを通じて具体的に問題を解決し、課題を達成することが主な目的。

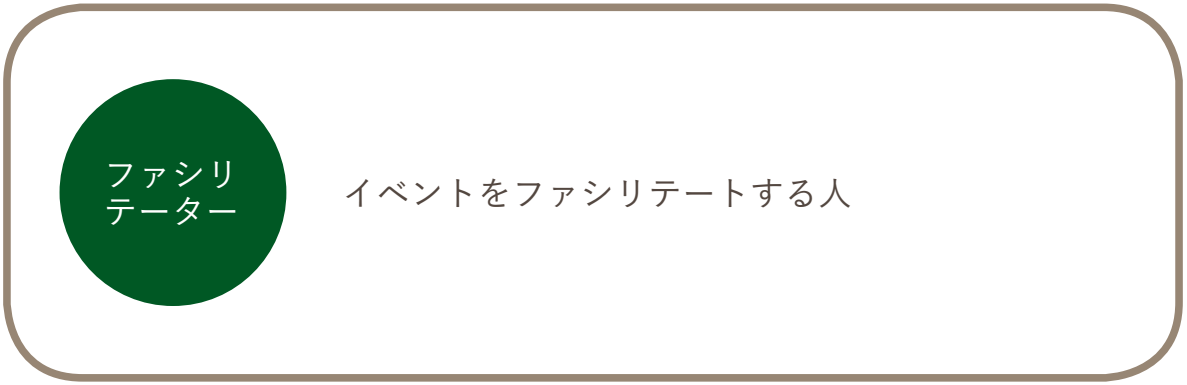
例：フューチャーセッション、ハッカソン、社内会議、理事会、自治会、生徒会、実行委員会、まちづくり協議会、国会、裁判、住民投票、国民投票など

アドレス３のイベント

コミュニケーションの場の外側に働きかけ、参照情報を提供したり、意思を表明したりすることで、間接的に問題・課題へアプローチすることが主な目的。

例：パブリックコメント、意見聴取会、委員会、審議会、円卓会議、コンセンサス会議、市民陪審、討論型世論調査（DP）、シナリオワークショップ、World Wide Views、プラーヌンクスツェレ、選挙、署名運動、抗議集会、デモ行進など

プログラムの概要 － ファシリテーター



ファシリテーター

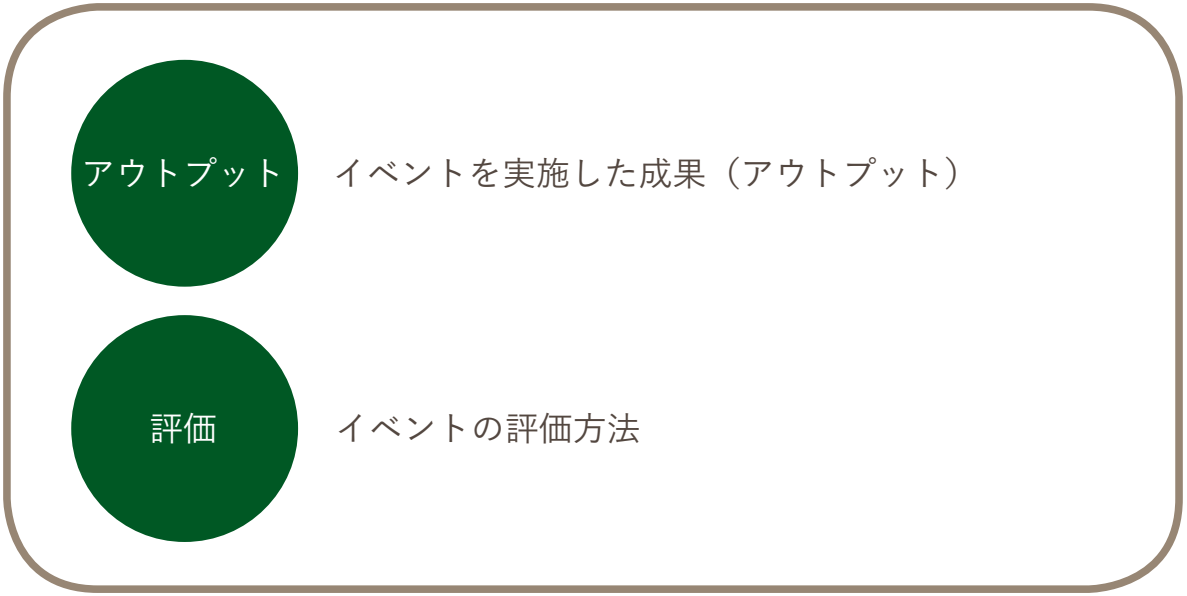
イベントのファシリテーターについて記載します。イベントの内容に応じて、ファシリテーターに求められる技術と経験、内部の人材が担当するか、外部の専門家に依頼するか、必要な人数などを考えましょう。

ファシリテーターには、イベント全体を取り仕切る「全体ファシリテーター」と小グループでの対話や作業を管理する「グループファシリテーター（テーブルファシリテーター）」の２種類に大別できます。

ファシリテーターは、対話の場を円滑に運営することが役割のひとつですが、進行が上手な司会者とは異なります。イベントの目標を達成するために、イベントの背景や構造をよく理解し、対話や作業を促進する技術を持った媒介の専門性が求められます。とりわけ、中立的な場の運営、多様な立場の人々が参加する複雑な問題を扱う場合に重要な役割を果たします。

ファシリテーションの技術には、参加者が発言しやすい雰囲気をつくり、参加者間の関係を構築する技術、多様な意見を引き出すための問いかけの技術、意見を整理しまとめる技術などがあります。それらの多くは、学ぶことが困難な個人的技能ではなく、目的に応じて多様な手法が開発され、公開されています。

プログラムの概要 – アウトプット / 評価



アウトプット

イベントを実施して得られる成果（アウトプット）を記載します。イベント中に書かれた付箋紙、模造紙、録音・録画記録やその文字起こし、参加者へのアンケート、参加者間の合意文書や第三者への提案書、実施報告書など、イベントの性質に応じて具体的に決めておきましょう。イベントの目標が達成されたかどうかを検討するための資料にもなり、その後のコミュニケーションへ大きな影響を与えます。

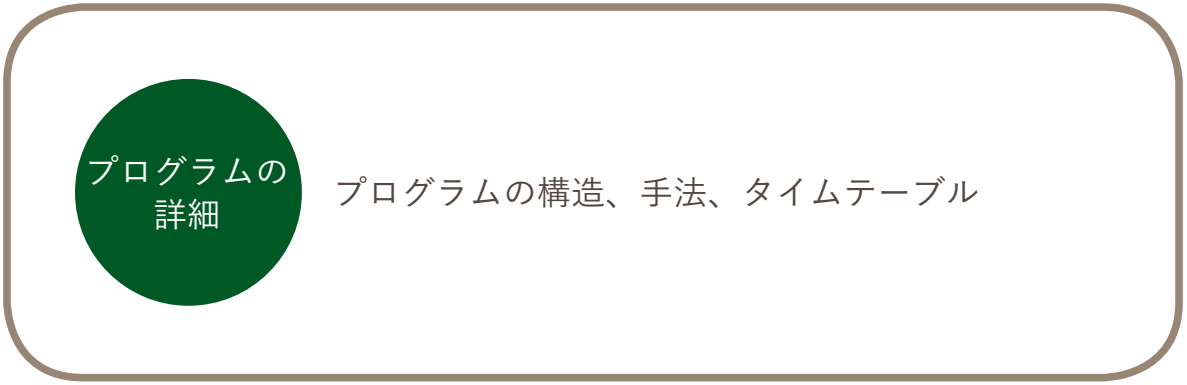
評価

イベントの評価方法について記載します。評価は、イベントを事後的にふりかえり、コミュニケーション全体へとフィードバックするために行います。イベントのプログラムと不可分のため、企画段階から評価方法についても計画しましょう。

評価の観点は、①目標の達成状況、②プロセスや手続きの妥当性、③参加者の満足感に大別できます。これらの観点を踏まえ、イベントに応じて測定可能な指標、方法を考えてください。

なお、個別のイベントについて目標が達成できたかどうかに一喜一憂せず、設定した目標の妥当性、プログラムの適切性を、コミュニケーション状況の変化、問題解決への貢献など、より長期的な観点から振り返ることも必要です。

プログラムの詳細



プログラムの構造

1	導入（チェックイン、オープニング、アイスブレイク）
2	メインプログラム
3	まとめ（チェックアウト、エンディング）

モード		スケール		フェイズ
知識・情報共有	×	全体	×	発散
対話・共創		グループ		収束

イベントについて、プログラムの構造と流れを記載します。多くのプログラムは、導入（チェックイン、オープニング、アイスブレイク）、メインプログラム、まとめ（チェックアウト、エンディング）の３つに大別できます。

メインプログラムは、モード（知識・情報共有、対話・共創）、スケール（全体、グループ）、フェイズ（発散、収束）に応じて、２×２×２＝８通りの組み合わせが考えられます。もちろん、それほど単純ではありませんが、具体的な手法を選択する際の目安にはなるでしょう。

手法については、様々な方法が開発され、多数の資料が公開されています。つぎのようなサイトを参考にしたり、コミュニケーションの専門家に相談しながら適切なものを選択してください。

でこなび（大阪大学） http://decocis.net/navi/
OUR FUTURES（株式会社フューチャーセッションズ） https://www.ourfutures.net
リスクコミュニケーション事例調査報告書（科学技術振興機構）
https://www.jst.go.jp/csc/mt/mt-static/support/theme_static/csc/pdf/riskfactresearch.pdf
新しい科学技術コミュニケーションの事例調査報告書（科学技術振興機構）
https://www.jst.go.jp/csc/mt/mt-static/support/theme_static/csc/pdf/result26/sakura_besshi.pdf

ロジスティクス

ロジスティクス　事前、当日、事後のロジスティクス

1	事前	予算要求、会場手配、物品調達、資料作成、著作権処理、講師招聘、広報、会場設営、予行練習など
2	当日	受付、誘導、運営、記録など
3	事後	会場撤収、経費清算、収支報告、実施報告など

スケジュール・留意点・事務局

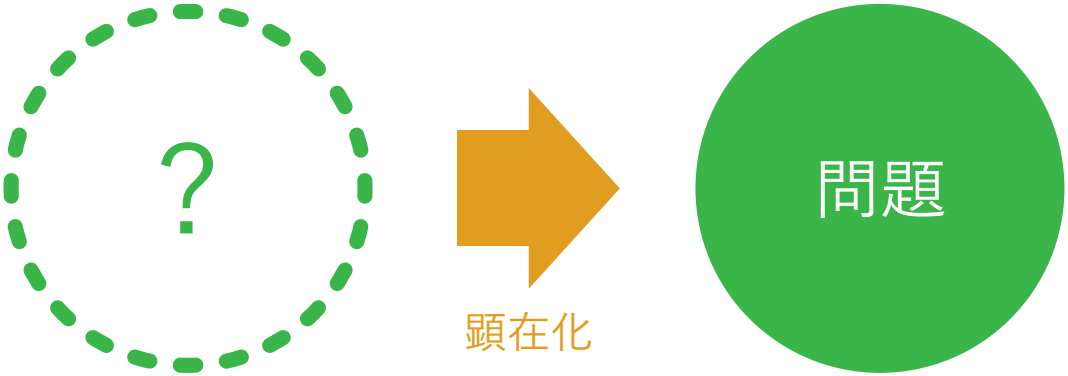
スケジュール　イベント終了までのスケジュール

留意点　イベントを実施する上での留意点

事務局　イベントの事務局

北海道大学農学部の事例

事例１　問題が顕在化する前のコミュニケーション



シリーズ学習会「トランス脂肪酸　with 消費者協会」
シリーズ学習会「農作物の育種って何ですか？ GMO から NBT まで」
食の安全セミナー「BSE から E 型肝炎まで」

問題が顕在化してしまうと、個別の利害を巡ってコミュニケーションが困難になります。また、問題が社会で共有されず、適切なタイミングで対応することができないと、事態が深刻化する恐れもあります。平常時のコミュニケーションを通じて、知識・情報共有、相互理解を図り、期待と懸念を明らかにすること重要です。

ポイント

- 提供する専門知と参加者の多様性による中立性の確保
- 偏りのない専門家の選定
- 背景知識からテーマをめぐる最新の情報へ
- 対話を通じた理解の深化、疑問点の整理、相互理解
- 対話を可視化するファシリテーション

シリーズ学習会 with 消費者協会「アミノ酸・トランス脂肪酸」

トランス脂肪酸のリスク評価が公表される頃に行われた学習会。関心の高まっていたトランス脂肪酸だけでなく、アミノ酸や脂肪酸について広く背景知識を共有し、生活の中に活かせる工夫をした。事前学習を通じてより深い理解を得ること、質疑応答時間を講演時間と同程度にすることにより、主体的な学習の機会となるように配慮した。(2013 年、全３回)

シリーズ学習会「農作物の育種って何ですか？ GMO から NBT まで」

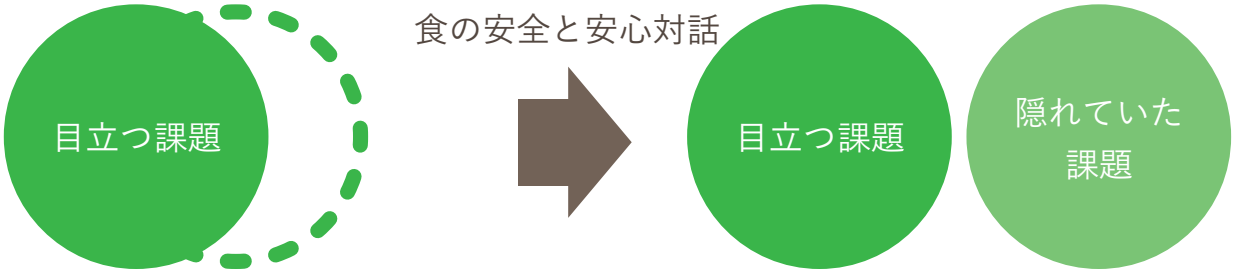
従来の遺伝子組換え技術（GM）との差異が問われる新しい育種技術（NBT）が世の中に知られるようになった頃に行われた学習会。NBT について文脈的な理解ができるように、栽培作物の歴史、育種技術の発展、GMO をめぐる議論を幅広く紹介するように工夫した。対話における役割をくじ引きで決めたり、まとめの場面ではグループファシリテーターを参加者中の適任者に依頼するなど、対話を通じて理解を深める場づくりを行った。また、打ち解けた環境で対話を行うためにランチ・ミーティングも取り入れた。(2014 ～ 2015 年、全４回)

食の安全セミナー「BSE からＥ型肝炎まで」

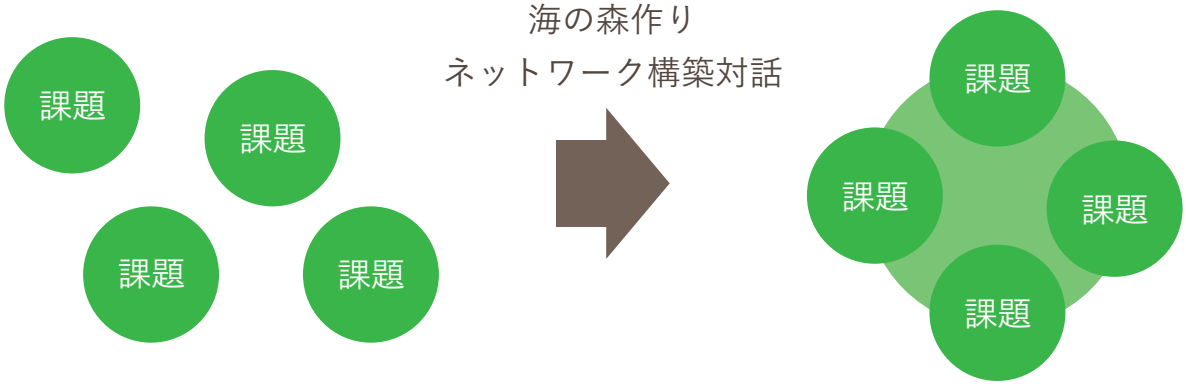
食の安全について、特定のテーマに限定せず、参加者同士の対話を通じて理解を深めるために行われた学習会。対話グループを固定せず、参加者が広く交流する機会をつくるため、ワールドカフェ形式を取り入れた。グラフィックファシリテーターが作成した絵巻物を用いてセミナーを振り返り、参加者の多様な意見を可視化して相互理解を深めた。（2012 年、全１回）

事例２　課題構築のためのコミュニケーション

興部から見る
食の安全と安心対話



海の森作り
ネットワーク構築対話



福島と札幌を
結ぶ対話

課題は自然に発生するわけではなく、なんらかのプロセスを経て構築されるものです。社会の中で比較的共有されやすい課題もあれば、積極的なアクションなしには顕在化されない課題もあります。放置しておくと見失ってしまう重要な課題を構築することも、コミュニケーションの大切な役割です。

ポイント

- 目立ちやすい課題の陰に隠れて見えない課題を構築する
- 分断された課題を接続し、俯瞰することにより課題を構築する
- 異質なものの結合により、より本質的な課題を構築する

興部から見る食の安全と安心対話

GM 作物のように大消費地で関心の高い議論に隠れてしまいがちな、食の安全と安心に関する地域の課題を発見するために行われた対話。地域の産業構造と特徴を学習することから始まり、参加者が「興部の自慢」、「困っていること」を話し合い、地域の良さと課題を明らかにした。まちづくりの視点から、参加者の多様性、意見に配慮し、主催者との事前協議に十分な時間をかけた。(2013 年、全１回)

海の森づくりネットワーク構築

海の森を陸と海から眺める円卓会議

コンブを生産する海（海の森）の環境に影響をあたえる自然条件や、社会的、経済的条件を考え、農家、酪農家などの多様なステークホルダー（関与者）とともに、情報共有、相互理解を図り、陸と海に渡る問題を明らかにするために開かれた会議。インターネットで中継し、twitter、Facebook などの SNS を通じて得た意見を会議の場で参照し、多様な意見の反映を試みた。(2013 年、全１回)

福島と札幌を結ぶ対話

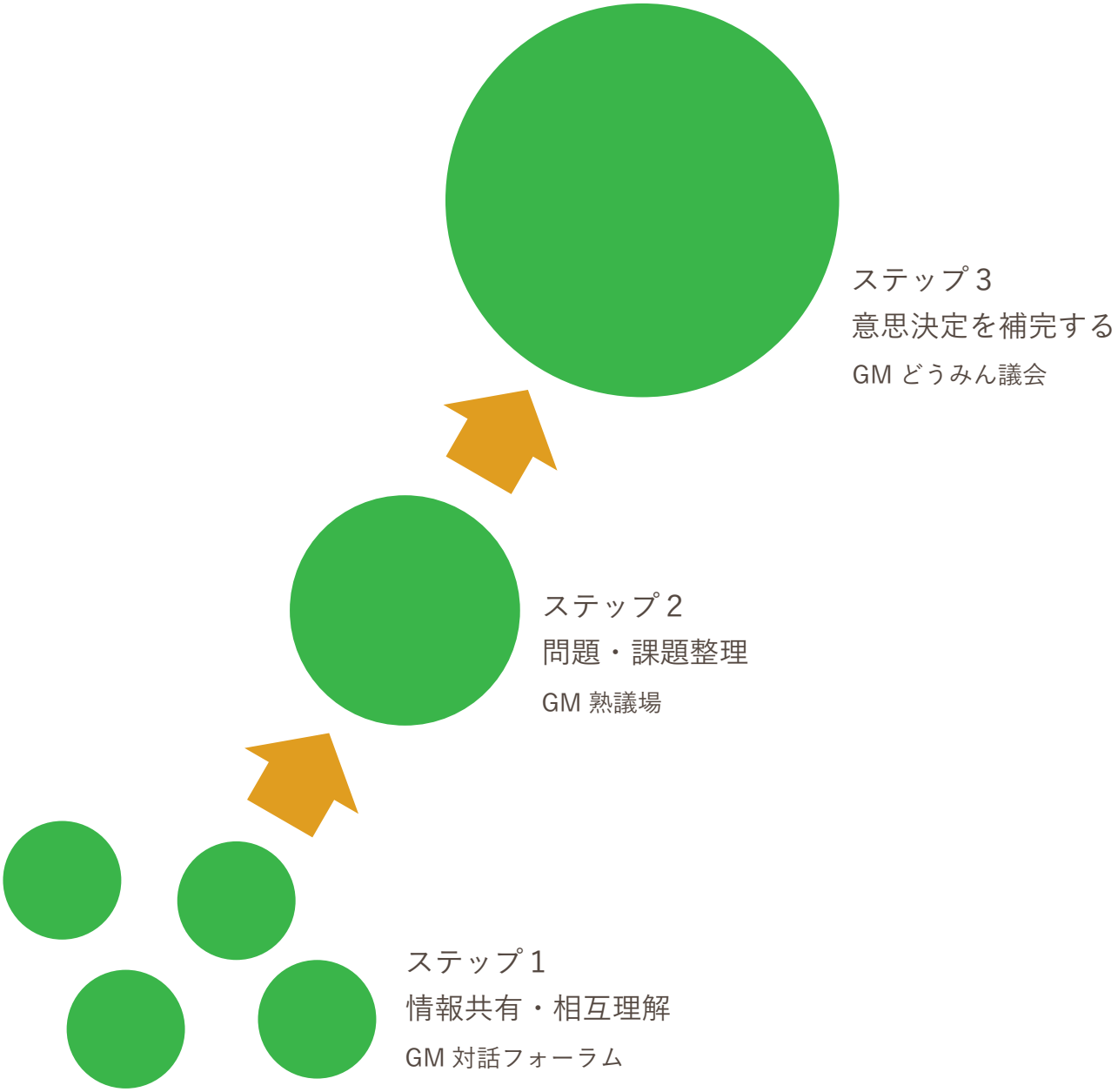
キックオフイベント「モモをめぐる語り合い」

東日本大震災後１年半が経過した福島県の農業の現状と再興の試みを札幌市民と共有し、相互理解を図るために開かれた対話。専門家らの鼎談を聞いて現状を共有したのち、グループ討論を行った。従来からの道内農家、飯舘村から避難し新たに道内で酪農業を再開した農家など、多様な当事者が参加することにより、深い議論の場となった。（2012 年、全１回）

福島と札幌を結ぶ対話　語り場「福島を知ろう・語ろう」

東日本大震災から約２年が経ち、福島市周辺の消費者が如何にして放射能を学び、問題に向き合い、課題を克服していったか札幌市民と共有し、相互理解をはかるために開かれた対話。コープ福島から招いた講師が、「みなさんは福島県産品を食べますか？」「北海道で給食の放射線量調査をする理由は何ですか？」と札幌市民に問いかけ、車座で話し合った。容易には解決できないが、考え続けなければならない問いの重要さが明らかになった。（2013 年、全１回）

事例３　発展するコミュニケーション



単発のイベントで問題解決・課題達成に至ることはないと言っていいでしょう。だからといって、闇雲にイベントの回数を重ねるだけでは、資源を浪費するばかりです。個々のイベントを有機的に結びつけ、コミュニケーションを発展させていくことにより、アウトプットが積み重なり、有効なアウトカムを生み出すことができます。ここでは、3つのステップで発展するコミュニケーションの事例を紹介します。

ステップ１　情報共有、相互理解のためのコミュニケーション
ステップ２　問題、課題整理のためのコミュニケーション
ステップ３　意思決定を補完するためのコミュニケーション

ステップ１　情報共有・相互理解のための対話（GM 対話フォーラム in 千歳）

「北海道 GM 条例」の完全施行後（2006 年１月）、GM 作物を憂慮する消費者や生産者、GM 作物を広げていきたい研究者、栽培したい生産者などが、知識・情報共有を行い、相互理解を深めるために開かれた。３年後に行われる条例の見直しを見据え、多様な参加者に開かれ、特定の立場に寄らない中立的で双方向性を持った場を継続的に設けていくことを目指した。（2006 年、全３回）

ステップ２　問題・課題整理のための対話（GM 熟議場）

２回目の北海道 GM 条例見直し（2012 年）を２年後に控える中、多様な人々が今後の北海道の農業と食のあり方を考え、GM 問題について議論し、その結果を行政へ届けることを視野に、検討すべき課題の整理を行った。（2010 年～ 2011 年、全３回）

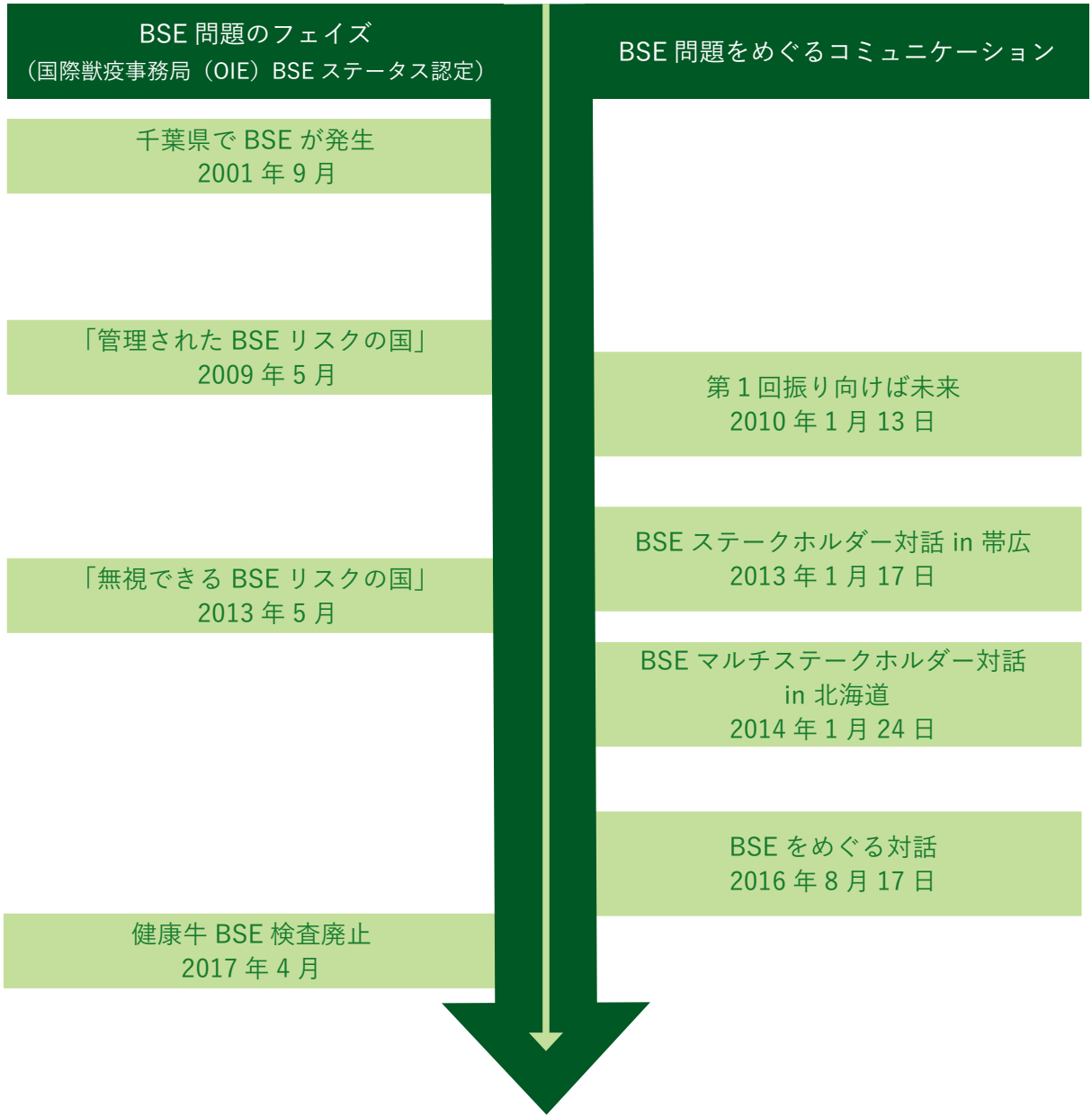
ステップ３　意思決定を補完するための対話（GM どうみん議会）

北海道 GM 条例の２回目の見直しにあたり、行政の意思決定を補完する参照情報を提出することを目指して開かれた。

イギリスで行われた GM jury（市民陪審）の手法に倣い、北海道電子電話帳から無作為抽出した 3000 人にアンケート調査を行った。625 通の回答があり、対話イベントへの参加希望者 158 名から、年齢、性別、職業などが北海道民の構成比を反映するように 16 名の参加者（どうみん委員）を選んだ。

１日目に、北海道で GM 作物が栽培される場合、どのような機能を持った作物を、どのような条件で栽培してよいかを話し合い、２日目に北海道農政部に提出することを想定した文書としてまとめた。(2010 年、全１回)

事例４　問題のフェイズに応じたコミュニケーション



同じ問題であっても、中期、長期的な時間スケールで考えると、問題の変質、社会状況の変化、ステークホルダー（関与者）の変容などにより、コミュニケーションに求められる目的・機能も変わります。適切な問題把握、コミュニケーション状況の理解を踏まえて、フェイズに応じたコミュニケーション・デザインとイベント・デザインを行いましょう。
ここでは、BSE 問題を例として、国際獣疫事務局（OIE）による BSE ステータス認定の変化、社会的な議論の状況、管理体制の変化などに注目して行ったコミュニケーションの事例をご紹介します。

第１回振り向けば未来

実質的全頭検査体制が敷かれ、国際獣疫事務局（OIE）によるBSEステータスが「管理されたBSEリスクの国」と認定された後に開かれた。BSE問題がおおむね沈静化した時期であり、それまで行われたBSE問題をめぐるコミュニケーションのあり方、検査体制について再検討し、信頼回復と今後の検査体制のあり方を話し合った。

過去の行為を互いに批判し合うのではなく、他者の考え、感情を尊重し相互理解を深めることで、前向きに過去を振り返り、未来のあり方を考える対話の場を目指した。

BSEステークホルダー対話　in 帯広

BSEの検査体制が、実質的全頭検査体制から新体制になることが検討され、OIEによるBSEステータスが「無視できるBSEリスクの国」になることが予想される時期に開かれた。

BSEをめぐるステークホルダー（関与者）が、今後、BSEとどのように向き合うかを考えるため、BSE問題に関する情報を改めて整理した上で、飼料規制、検査体制、未だにはっきりしない点、リスクコミュニケーションのあり方などを話し合った。

BSE マルチステークホルダー対話　in 北海道

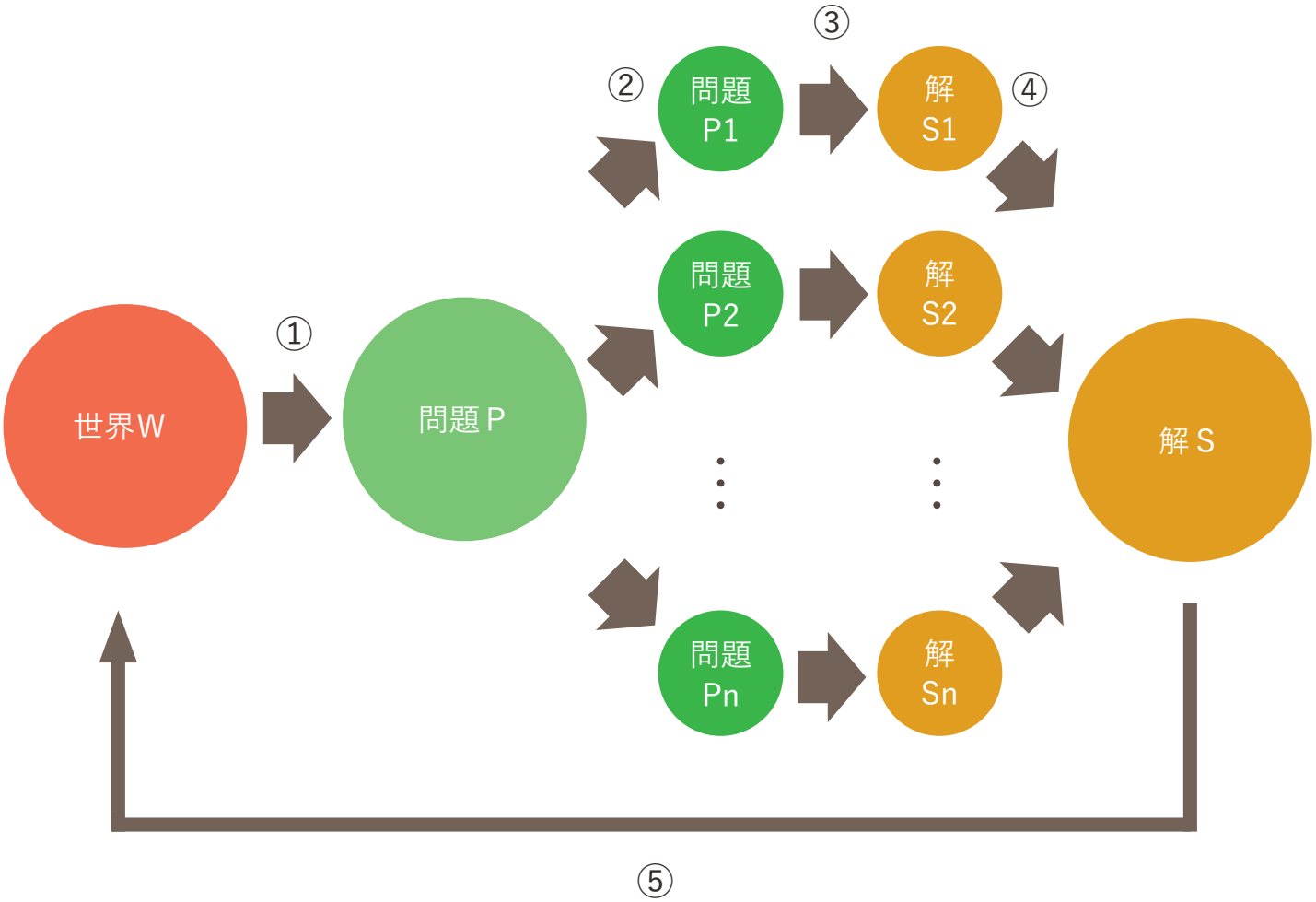
OIE による BSE ステータスが「無視できる BSE リスクの国」とされ、検査体制も改められた後に開かれた。BSE をめぐる社会的な議論が沈静化しているように見えるが、特定危険部位（SRM）の範囲、全頭検査の廃止などの残された問題を巡って不安を拭えない消費者が存在する中で、将来の課題を整理し、ステークホルダー（関与者）による対話を通じて、それぞれの立場で今後に備えるための対話を行った。

BSE をめぐる対話

48 か月齢超の健康牛の BSE 検査廃止に対するパブリックコメント募集時期に開かれた。

SRM の月齢問題や肉骨粉の利用問題、関心が薄れると管理が甘くなるのではないかという懸念などについて話し合い、参加者が主体的に問題と向き合うために「自分が考える BSE 問題の今後のあり方」をシナリオとしてまとめた。シナリオづくりは、参加者がアンケートに答える形式で行い、アンケートの項目は、2 回の円卓会議を通じて検討した。

おわりに －
なぜコミュニケーションなのか



① 問題Ｐは明確な輪郭をもってあらかじめ世界Ｗに存在しているわけではない。窓から世界Ｗを眺めても、問題Ｐがごろりと転がってはいない。何らかの手続きを経て構築されなければならない。手続き次第で、問題Ｐの色も形も変わる。だれがそれを構築すべきか。

② 構築された問題Ｐを、そのままの形で解くことは難しい。前提と対象を限定した解きやすい問題 P1、P2、…Pn に分解される。しかし、分解の仕方は一通りではない。その過程で重要な要素が見失われ、意図的に隠されることもある。問題Ｐの分解はだれが行うべきか。

③ 分解された問題 P1、P2、…Pn は、専門家が解く。それでうまくいくことが多いが、ときには、専門家の間で意見が割れることもある。問題 Pn に対する解 Sn が一意に決まらない。割れた解 Sn をどう受けとめるべきか。

④ 分解された問題に対する解を縦に並べてみても、もともとの問題Ｐの解Ｓが直ちに導かれるわけではない。S1、S2、…Sn を組み合わせて、問題Ｐに対する解Ｓを構成しなければならない。では、どうやって？

⑤ 解Ｓを手にしたとして、それを世界Ｗに適用してうまくいく保証はどこにあるのか。うまくいったかどうか、だれが検証するのか。解Ｓを適用した結果、世界Ｗに害がもたらされたとき、関わった人たちはこういうかもしれない。「それは、想定外でした。」

だから、コミュニケーションなのです。

文部科学省科学技術人材育成補助事業
「リスクコミュニケーションのモデル形成事業（機関型）」平成 26 年採択課題
国立大学法人北海道大学　リスコミ職能教育プロジェクト

食と農のリスクコミュニケーションハンドブック

2017 年 11 月 30 日発行

監修　奈良由美子　放送大学教授
　　平川　秀幸　大阪大学教授

企画　小林　国之　北海道大学大学院農学研究院准教授
　　吉田　省子　北海道大学大学院農学研究院客員准教授
　　棚橋　知春　北海道大学大学院農学研究院学術研究員
　　堀　　浩子　北海道大学大学院農学研究院事務補佐
　　明田川知美　北海道武蔵女子短期大学専任講師
　　渡邊　瑞穂　科学技術コミュニケーター
　　竹内　琳加　北海道大学大学院農学院

制作・著作　白根　純人　科学コミュニケーション研究所　共同代表
　　田原敬一郎　科学コミュニケーション研究所　共同代表
デザイン　ふじもとこ　科学コミュニケーション研究所　デザイナー
校閲　三村　麻子　科学コミュニケーション研究所　エディター